

希望の旅立ち

西内 正志（教育学研究科高度教職実践専攻）

人間に種類なんてあるのか。本書は「自分らしさや社会で生きていくとは」という疑問を若者が織り成す世界を通して描いた作品である。

登場人物は5人。主人公の賢司はコンピュータ系会社のサラリーマンとして何不自由ない生活をしてきた。しかし朝から晩までコンピュータと向き合って仕事をする意味や理由がわからなくなり退職してしまう。対照的に高校の同級生である凌一は、思いつきと勢いで好きなことをやっていく生き方をしていた。やがて自らがデザインした服を扱うブランド「ストロボ・ラッシュ」を立ち上げる。椿は凌一が通っていた服飾専門学校の助手教員で、派手な外見とは裏腹に基本の洋裁技術の枠から抜け出せない自分とは異なる凌一の創造性に惹かれてブランドに参加する。カツオは服飾系の留学経験と抜群のセンスを持つ低姿勢の少年で、見るに堪えない自分を輝かせてくれるファッションを楽しむ目的でブランドに参加する。ユミコは賢司の同期で彼の仕事姿に惹かれて恋人となるが、退職を機に別れた後毎晩のように会社の愚痴を留守電するようになり新会社設立を提案する。

物語は賢司が退職する朝から始まる。初めは定職にも就かず好きなことばかりやっている凌一たちをどこか見下していた賢司だったが、誰かに指示されるわけでもなく自分たちの意志で熱心に活動する姿をうらやましく感じるようになる。特に夢や目標が無い賢司はストロボ・ラッシュのメンバーと過ごす時間が増すにつれ徐々に引き込まれていく。やがて展示会への出展を決意した凌一たちから度外視してきた経営管理を依頼される。メンバーとも打ち溶け仕事にやりがいを感じるようになった賢司はストロボ・ラッシュの展示会成功を自らの使命と感じるようになり充実した日々を過ごすようになる。そんな矢先事件が起こる。展示会まで一刻の猶予もない時期に凌一と椿がホテルに行く理由で休んだのだ。その行為自体やそれを平気で容認するカツオの姿に一体感を感じ始めていた賢司は嫌気がさしてしまう。さらに出展直前で凌一から展示会への参加を取りやめたことを聞かされる。理由は出展に間に合わせるために創った作品が自分の理想とかけ離れていることだった。その発言や行動を到底理解できない賢司。やはり自分とは違う世界の間人なのだという思いが湧き上がる。

本書は賢司から見た視点で描かれている。会話中心の軽快な文章はその場にいるかのように読みやすい。また異なる特徴を持つ精選された登場人物と、誰しもが抱いたことのある

テーマを用いることで、身近にいる若者の日常を垣間見ているような親近感を覚える。冒頭の問いに対し本書は2つの視点を与える。1点目は賢司が自分を組織型と表し、凌一たちをあちら側（自由型）と表している点である。賢司のストロボ・ラッシュに対する態度やユミコの仕事を辞めた賢司に対する態度からは組織型から見た自由型への羨望感が滲み出る。同時に他人を巻き込みながら自分の理想からかけ離れていく現実との溝に悩む凌一や、基本の枠から抜け出せないと分析する椿、着飾らないと見るに堪えないと卑下するカツオなど、自由型が抱く不安や葛藤も表現している。

2点目は男女差である。理想を追う凌一や好きなことを楽しむカツオ、後先考えずに退職する賢司に対して、助手教員として勤める椿、愚痴や独立を提案するが働き続けるユミコの姿が対照的である。また凌一から展示会不参加を聞かされた場面では、号泣し取り乱す椿に対して、服を楽しみたいだけと無感情なカツオの姿が、別れた後毎日留守電するようになったかと思えば独立の誘いを拒否した途端連絡が途絶えるユミコの行動と、それを理解できない賢司の姿など、随所に男女の感情や行動の特徴を捉えた表現がされている。

社会で生きていくためには少なからず集団に属し他者との関係の中で自らを調節していかなければならない。筆者は、賢司に「趣向や感性など同じ方向性の人間はいるが完全に同じ種類の人間なんていない」と発言させ、ユミコには「人間に種類なんてなく自分で勝手に線を引きしているだけ」と表現させている。極論を言えば、同じ人間である以上全く重なり合わない人もいなければ、個性がある以上完全に一致する人もいないというわけだ。そう考えると我々は、自分の枠を拡大したり変形したりしながら重なる部分の大小の中で他者との関係を築いていることになる。

そんな難しい印象を受ける本書のラストは、前職と同じような会社の面接を終えた賢司と、展示会の一件で揺れたストロボ・ラッシュのメンバーが楽しく遊ぶシーンで締めくくられている。組織型・自由型ともに再スタートという感じだが、そこにはそれぞれ自分の枠を少しだけ抜けた希望に満ちた新たな旅立ちの様相が漂う。同じ場所に戻ったようでもそれはもう一段上のスタート地点なのである。テーマの重さとは対照的に希望に溢れた気持ちにさせてくれる一冊である。

鈴木清剛著『ロックンロールミシン』（河出書房新社1998年）